

末永く未来に繋がる剣道を信じて

愛知県

江南武道館

中学2年 東 美 緒

「今すぐ入院してください。」

中学一年の十一月七日、私は絶望を味わった。

目眩がする。立ってられない。稽古に集中できない日が何日、いや何カ月か続いた。たった面打ち三本がとてもつらい。過呼吸になる。それでも稽古がしたい。休みたくない。すでに限界を越えた体を無理矢理動かし、がむしゃらに稽古をこなした。そんな私の姿に違和感を感じた母が病院に連れていってくれた。結果は「鉄欠乏性貧血」重度の貧血だった。医師から、即座の入院を言い渡された。私にとって入院生活は、つらく悲しいものだった。大好きな剣道ができない。その言葉が体中を駆け巡った。入院生活の不安もあってか、高熱を出した。寝れない夜が続いた。不安に襲われた私を助けてくれたのは、両親だった。母は、家と病院を何度も行き来してくれた。父は、いつも以上に私の話に耳を傾けてくれた。私は、両親に心から感謝をした。

入院生活に少しずつ慣れてきた三日目、この日は道場で稽古がある日だった。稽古開始の七時、私は少し窓を開け、道場の方向に耳をすました。竹刀と竹刀が当たる音が私の耳にはっきり届いた。父にこの話をしたところ、「道場とこんなに離れているのに、竹刀の音が聞こえるはずないよ。」と笑われたが、私の耳には、竹刀の音がはっきりと聞こえた。

『剣道がしたい』入院生活中、何度思ったか分からない。大好きな剣道を、大好きな道場でやれることは当たり前ではないと私は身を持って知ることができた。道場の仲間とまた稽古ができるように、早く病気を治そうと心に誓った。

入院生活を終えて、ついに退院することができた。退院した次の日、道場に行った。十一月いっぱい運動を禁止されているため、稽古に参加することはできなかった。だが、道場の空気、竹刀と竹刀がぶつかる音、仲間の声。私にとって、大切で大好きな場所が今、ここにある。それがとても嬉しかった。

十二月末、私にとって一番大切な大会がやってきた。稽古ができるようになり、一カ月も経っていなかったが、この大会だけはどうしても出たかった。試合に出れる嬉しさと緊張を抱えながら、私は相手に向かって一礼をした。

「はじめ。」

審判の声を聞き私は立ち上がった。前に攻める。相手の竹刀を触りながら少しずつ前へ。いける。私は一足一刀の間合いから面を打った。審判の旗が上がった。一回戦を無事突破することができ、緊張が消えた。その後は順調に勝ち進み、決勝戦まで勝ち上がることができた。これに勝てば優勝。四連覇を成し遂げる、あと一步だ。決勝戦。審判のかけ声とともに立ち上がった。足を小刻みに動かし前に攻める。決して下がらない。少しでも後ろに退けば負ける気がしたから。前へ前へ。私の間合いになった。ここだ！面に跳んだ。審判の旗は、相手の選手に上がった。結果は準優勝。悔しかった。優勝して私を支えてくれた両親に『私はもう大丈夫』と自信を持って言いたかった。母は、「今までの優勝よりも一番嬉しい。ありがとう。」と言い、泣いていた。私も自然と涙があふれた。

『恩送り』この言葉は道場の先生から教えてもらった言葉だ。人からもらった『恩』を他の人に繋げることだ。私は入院生活中や、退院後も沢山の人から『恩』をもらった。次は私の番だ。剣道を志す全ての人にこの恩を繋げていきたい。

私は未だ病氣と戦っている。それでも私は今日も竹刀を握る。一度きりしかない私の剣道人生。悔いが残らぬよう前を向いて剣の道を歩んでいこう。

未永く未来に繋がる剣道を信じて。